



再発見

Takasaki's
Sightseeing
Rediscovery



口ケ地を訪ねて 『紅雲町珈琲屋こよみ』編

大きな観音像が見下ろす街

●人気小説をドラマ化

丘陵から大きな観音像が見下ろす北関東の街を舞台にした吉永奈央さんの推理小説『紅雲町珈琲屋こよみ』が、2018年春にシリーズ第6巻『花ひいらぎの街角』が発刊されている。

『紅雲町珈琲屋こよみ (文藝春秋)』は、累計50万部の人気シリーズとなっている。主人公は70代の女性、杉浦草。2018年春にシリーズ第6巻『花ひいらぎの街角』が発刊されている。

吉永さんは学生時代から長く暮らしてきた高崎を小説のピースに埋め込んでいる。シリーズ一作目冒頭の風景描写は、高崎市民であれば、どこを描いているのか、すぐにピンとくる。面白い小説は書き出しから印象的である。読み進むと上越新幹線や群馬交響楽団にちなんだオーケストラ「三山フィルハーモニー」も出て来る。小説をもとにしたNHKテレビドラマ

『紅雲町珈琲屋こよみ』(2015年)では、富司純子がお草さんを演じ、高崎も口ケ地となった。観音山丘陵と烏川・碓氷川の俯瞰が「紅雲町」の風景に使われ、群馬音楽センターも登場した。

「紅雲町」というのは、漢字の表記も音の響きも、とても美しい地名だ。吉永さんの心の片隅に、ずっととどまっていたらしい。

紅雲町という町は、高崎市の隣の前橋市内に実在し、群馬県庁の庁舎の南側、利根川の崖上に広がる住宅地で、書名だけ見た群馬県の人の中には、前橋の物語と思っていたという話も聞く。

●高齢社会に出現した
新たな探偵像

小説に出て来る紅雲町は、東京山の手のような高台に住宅や高級マンションが立ち並び閑静な住宅地だ。大きな観音像が立つ丘陵のふもとで、ここに、お草さんの店「小蔵屋」がある。お草さんが65歳の時に、実家の古い雑貨屋をリニューアルした店である。小蔵屋はコーヒー豆や和食器を売る店で、お草さんの細やかな心配りのおかげで、わりが伝わってくる。

小蔵屋は「コーヒー豆の店」で、コーヒーは試飲として無料で飲める。無料のコーヒーをお目当

てに、入れ替わり立ち代わり老若男女がやって来る。そして客たちのたわいもない会話や、カウンターのお草さんにも聞こえてくる。女子高生がホラー映画まがいの怪奇事件を目撃した話をしていりし、近所でお年寄りを狙った強盗事件も起こっている。窓越しに小蔵屋を覗く怪しい男も現れた。張り込みをしていると、徘徊老人と間違われ、認知症の噂が立ったりするが、お草さんは高齢社会の都市問題を解決する名探偵である。

●悔恨と祈りが物語の伏線に

紅雲町には、橋と交差する三ツ辻の傍らに地蔵を祀る小さなほこらが残っている。ほこらの前に身をかがませ、赤い帽子とよだれかけを作ってお地蔵様にかがせ、手を合わせるお草さんの姿がある。離婚し、幼い息子を水の事故で無くしたお草さんの過去と悲しみ、悔恨は、『紅雲町珈琲屋こよみ』を読む上での伏線となっている。

■吉永奈央さん (よしなが・なお)

1964年埼玉県生まれ。2004年「紅雲町のお草」でオール讀物推理小説新人賞受賞。2008年「紅雲町ものがたり」文春文庫「紅雲町珈琲屋こよみ」シリーズ第1巻「秋を揺らす雨」第2巻「その日まで」第3巻「名もなき花の星」第4巻「糸切り」第5巻「まむきの星」第6巻「花ひいらぎの街角」。